極限の名を冠するＩＳ

赤枠改

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＩＳを動かすことができる男性が現れ
他にもいないかと探したところもう１人動かせる男性がいた
その名は　巴　楠木（ともえ　くすき）
果たして彼はもう１人の男性と共にＩＳ学園でやっていけるのか？そして彼は一体何なのか？
※処女作です

目　次

第１話　自己紹介と男性ＩＳ適正者１号　――――――――　1
第２話　友人の幼馴染みとイギリス代表候補生　――――――――　12
第３話　喧嘩両成敗と記憶がない試合　23
第４話　天災と再開？　――――――――　36

第1話　自己紹介と男性ＩＳ適正者1号

俺の名前は巴（ともえ）　楠木（くすき）

この春高校生になり新しい学び舎、新しい教室、そして見知らぬクラスメイト達と青春を謳歌する普通の学生だ。

だったはずと言った方がいいかな…

（それにしてもこの視線は辛いなぁ…）

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉という本来ならば女性にしか扱えない代物を男である俺はなんと動かしてしまった。
そのせいで俺はＩＳ学園というＩＳについて学ぶ高校へ強制入学させられた。
元々ＩＳは女性にしか扱えないので回りは女子だらけだ。
そして物珍しさにこちらをチラチラ見てくる。視線が辛い通り越して痛い。
気分は動物園のパンダだ。
（ごめんなさいパンダさんあんなにジロジロ見てしまって…今ならあなたの気持ちが痛いほどよくわかります…
あっそうだ。気を紛らわさるためにお菓子でも食べるかな…）
そう思いバッグからお菓子を３種類ほど出す
全部出し終わったと思ったら目の前に２本のケモミミが…えっなにこれ？
「じーっ」
「え…えーっと」
「じーっ」
よく見たらケモミミのある着ぐるみを来た女子だった
えっ着ぐるみ着て登校しても大丈夫なの!?

いやそれよりこの子めっちゃお菓子見てる！
欲しいのかな!?
「よ、よかったら食べる？」
「良いの!?」
持ってきたお菓子はト〇ポとハ〇チュウとあと色んな味の入ってる飴だ
どれが好きなのかな？
「じゃあどれが良い？」
「全部！」
「……えー」
わかったこの子俺と同じで大のお菓子好きだ！
しかもえーって言ったらめっちゃ涙目で訴えてきた！
ええいそんな顔されても俺は乗せられんぞー！
「…じゃあ〇ッポ一袋とハイ〇ュウ3粒と飴は全種類1つずつね」
「わーいわーい！」
はいダメでした。
俺ああいう顔されるの苦手なんだよね…
「ありがとうともぴー！」

「と、ともぴー？」
「うん！巴くんだからともぴー！」
「あだ名かー、ところで君の名前は？」
「布仏本音だよーみんなからはのほほんさんって呼ばれてる～」
「そっか、じゃあこれからよろしくねのほほんさん」
「よろしく～」
　早くも友達ができたぞ！これは幸先いいぞー！
　とのほほんさんと一緒にお菓子食べていたら
〝男子〟が声をかけてきた。
「お前男だよな!?!!」
「…男だけど」
　開口一番に男かどうか聞いてくるとは…
　確かに俺は童顔で背も小さいけど俺は男だよ！
　と怒鳴りたいと思ったけど相手も動物園のパンダさん状態だったのを思ってぐっとこらえました
「織斑一夏だ！これからよろしくな！」
「巴楠木、これからよろしく織斑」

「一夏でいいぜ。男は俺たち二人だけだし仲良くしようぜ」
「そうだね。ならこっちも楠木でいいよ、改めてよろしく一夏」
「おう！よろしくな楠木！」
そうこの〝織斑一夏〟こそ男性ＩＳ適正者１号だ
男がＩＳを動かしたとあって全世界は他にも男性適正者がいるのではと男性を対象にＩＳ適正検査が全国で行われた。
そして俺にもＩＳ適正があったらしい
らしいというのは検査の時に俺がＩＳに触ったと思ったら気絶していたからだ。
目が覚めたときは病院のベッドの上、その後身体検査をしてもらったが特に異常は見当たらなかったらしいし、ＩＳ動かしたのは変わらないのでこうしてＩＳ学園に入学させられた。
でもたしかＩＳに触った時ずっと身につけているブレスレットが光ったような気がしたが…気絶する直前だったしまぁ多分気のせいだろう
一夏と男同士の熱い握手を交わしてたらちょうどよくチャイムが鳴った。

一番最初の授業とかＳＨＲって自己紹介が定番だけどＩＳ学園でもそこは同じみた

い

チャイムが鳴ってから入ってきた先生は副担任である山田真耶先生

見た感じしっかりというよりかはおっとりしてて生徒に好かれそうな印象だ。あとデカイ…どことは言わないけど

自己紹介も名前が逆さで読んでも同じ読みという分かりやすく覚えやすい自己紹介でさすが先生と思った。（小並感）

とまぁ先生のお手本の後に出席番号順で自己紹介していき次は一夏の番だ。

…みんなの視線が尋常じゃないが大丈夫かな？

「じゃあ次は織斑一夏くん」

「は、はい！」

声裏返ってるー

あの尋常じゃない視線にやられてしまったか…

ええいやってしまったことはしょうがない！

ファイトだ一夏！自己紹介で挽回だ！決めてやれぇ!!

「え、えっと織斑一夏です。」

「「「……」」」

なにこの間!?

それよりも一夏さんなにか他ないの!?
趣味とか好きな食べ物とか!!
「以上です!」
ズコォォォォォォ
と一夏を除くみんなが椅子から転げ落ちた。もちろん俺もだ
とみんなが椅子に座り直してたら新しく先生が教室に入ってきた。
第一印象はすごく綺麗な人だなと思った。
山田先生がかわいい系ならこの先生は美しい系な感じ。
あとこの人もデカイ…どことは言わないけど
そして一夏が出席簿で叩かれた。
スパァァァン!!
出席簿ってあんな音出たっけ…
もっと軽い音だと思ってたんだけど…
「げぇ司馬宙!?」
「誰が鋼鉄ジーグだ!」
また出席簿による一撃が一夏に炸裂した
女性に対してそれはないと思うぞ一夏…

「お前はまともに自己紹介もできんのか」
「ち、千冬ねぇ…」
「織斑先生だ馬鹿たれ」
　追い討ちのようにまた出席簿が放たれた
「はい織斑先生…」
　やだこわい…
　わかった！あの人の馬鹿力によってあの出席簿は鈍器になってるんだ！
「巴。今なにか言ったか？」
「いいえ！なにも！」
「次は無いと思え」
　なんでこの人さらっとこっちの考えてること読んでくるの…
　とりあえず余計なことは考えないで無心でいよう…
「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる為のＩＳ操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らっても構わんが、私の言うことは絶対に聞け。いいな？」
　それ逆らえないんじゃないんですかね…？

ん？ちょっと待て今織斑千冬って言った？

確か織斑千冬って第一回モンド・グロッソの優勝者でブリュンヒルデって呼ばれてるあの？

そして顔立ちといいさっきのやり取りといい二人は姉弟かな？

「キャーーーー！　本物の千冬様をこの目で見られるなんて！」

「お目にかかれて光栄です！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に北九州から来ました!!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しくも本望です！」

「私、お姉さまの命令なら何でも聞きます！」

ほえースッゴい人気

確かに有名人に会えて嬉しいのはわかるけど騒ぎすぎでは？耳痛い…

「……はぁっ。毎年毎年、よくもこれだけ馬鹿者共がたくさん集まるものだ。ある意味感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者だけを集中させるように仕組んでいるのか？」

毎年こんな歓声が起きるの？

有名人って大変だなぁ

「きゃあああああっ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」
憧れ通り越して変なことになってない!?
ドＭ発言してる人いるけど大丈夫!?
「ええい黙らんか！時間がないから最後に巴。お前が自己紹介しろ」
「あっはいわかりました…」
いきなり振ってきた！
順番通りならまだしも急に指名されたら緊張するに決まってるでしょ！
ええい落ち着け！考えた通りにやるんだ！
「…巴楠木です。趣味はアニメや特撮、マンガ鑑賞です。好きな食べ物は甘いものかな？右も左もわからない状態なので仲良くしてもらえると嬉しいです…以上です。」
「及第点だな。お前ならもう少し良いのができたと思うが…まぁいい。ではこれから授業を始める！」
なんとか及第点をもらえました
しかしなぜ初対面の織斑先生が俺に期待しているんだ？
ま、いっか！これで出席簿で叩かれずに済む！

と心の中でガッツポーズしてたらその程度で調子に乗るなと出席簿で叩かれました。
以後気をつけます…てか痛すぎて死ぬぅ！

第２話　友人の幼馴染みとイギリス代表候補生

「ここまでで何かわからないところはないですかー？巴くんは何かわからないところとかありませんか？」

それから授業が始まりある程度進んだところで山田先生が俺に問いかけてきた。

今やっているのは参考書に書いてあったところだからまだなんとかついていけてる

「いえ今のところはわからないってところはないです」

「さすが巴くんです！では織斑くんはどうですか？」

ん？さすが？ここ参考書に書いてあったところだよね？

さっきの織斑先生しかり山田先生もなんか俺のこと過大評価してないか？それとも男子だから特別視されてる？

それはあるかもしれないけど今の部分は参考書見ればわかるはずだから男女は関係ないはず…

うーん考えても答えにたどり着けない。保留にしとこう…

まぁ俺の次は一夏に聞に顔を向けたら一夏の顔が真っ青になっていた
…あれ?どうしたの一夏、体調でも悪いの?
「すいません山田先生…全部わかりません……!」
「ぜ、全部ですか!?えっと他にわからない人はいませんか?」
良かった体調が悪いんじゃなくて全然わからなくて真っ青になっていたのかー
てか全部か…もらった参考書って電話帳並みに厚かったから今やってたところはど忘れしちゃったのかな?
と一夏がなぜわからないのか考えていたら織斑先生が一夏の前に立っていた
「織斑、参考書はどうした?今のところは参考書を読んでいればわかるはずだが」
「電話帳と間違えて捨てました!」
えーマジかよ一夏…
確かあれど真ん中に≪必読!≫ってでっかく書いてあった気がしたんだけど…
「必読と書いてあっただろうが馬鹿者!」
と案の定織斑先生による出席簿アタックが一夏に叩き下ろされた。
さらにそのあと再発行するから一週間で覚えろと無茶ぶりを言われた一夏であった…
自業自得だがかわいそうに…

「…貴様、自分は望んでここにいるわけではない、と思っているな？」
さらに畳み込むように織斑先生からの一言
その言葉を受けて一夏がビクッと動く
わかりやすいね一夏…
確かに望んではいないしこれから大変だろうけどＩＳ乗れるしロボット好きの俺は悪くはないと思うけどなぁ
「望む望まないにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」
「…わかりました。織斑先生…」
これは社会人…いや人間として生きていくためには必要な力ですね？
さすがはブリュンヒルデ、言うことが深い…

「ねぇ一夏ってもしかしなくてもうっかりさん？」
「いやそんなはずはない…はず…」
「ともぴーもその辺で～おりむーもそのことは反省してるんだし～」
「それもそうだねのほほんさん」
休み時間になり一夏と俺、そして俺の前にひょこっと現れたのほほんさんと一緒にお

菓子を食べながら過ごしていた。
「でもさ一夏、自己紹介もあれだったけど趣味とか好きなものとかないの？」
「そうだな…家事全般は得意だしその中でも料理は好きだぞ」
「へーてっきり何かスポーツやってそうだからそっちかと勝手に思ってたけど意外と家庭的なんだね
…てかそれを言えば良かったんじゃ？」
「いや緊張しててそれどころじゃ…楠木は普通にできてたよな？緊張しなかったのか？」
「急に指名されて緊張はしてたけどある程度考えてたからね…初日だし多分自己紹介するんだろうなーとは思ってたし」
「準備してたわけか…」
「そういうこと。まぁあんましいい感じにはできなかったけどね」
「少しいいか？」
と一夏の趣味を聞いていたら1人の女子が声をかけてきた。
長い黒髪をポニーテールに結んでいて凛としていて見た感じ現代の大和撫子って感じの印象の子だった。
「…箒？」

「一夏の知り合い？」
「あぁこいつとは幼馴染みで箒っていうんだ」
「…篠ノ乃箒だ」
「俺は巴楠木。よろしくね篠ノ乃さん」
「箒でいい…」
「じゃあこっちも楠木でいいよ。よろしくね箒さん」
「よろしく頼む。ところで一夏を借りてもいいか？」
「えっここじゃダメなのか？」
「ダメではないが…」
　幼馴染みだって言ってたけど、一夏の反応を見るに久しぶりに会ったって感じかな？
…箒さんを見る限り間違っては無さそうだな
　久しぶりに会う幼馴染みだし話したいことは色々あるんだろうか？
　なぜか一夏は渋ってるけど…まぁ俺と話していたし先客が大事なんだろう
　でもここで変に拗れて言い争われでもされたら空気が悪くなるしここは箒さんに加勢しますかな
「まぁまぁ一夏、箒さんとは多分久しぶりに会うんでしょ？」
「そうだけどよくわかったな？」

「二人の会ったときの反応が最近会ったようには感じなかったからね。それよりも一夏、箒さんは久しぶりに幼馴染みに会ったんだから幼馴染みとして色々と話したいことがあるんじゃない？
「ん、そうなのか箒？」
「あ、あぁ！そうなんだ一夏！」
「そっか、じゃあ行くか箒」
「あぁ！楠木、お前はいいやつだな！」
「大げさでは？まぁ二人ともいってらっしゃーい」
「いっへらっふぁーい！（もごもご）」
「口に物を入れながらしゃべらないの」ポスッ
　うーん箒さんのあの反応からみて一夏に片想いしてるのかな？しかし一夏を見るに全然気づいてない模様…
　一夏ってイケメンだしライバル多そう…こりゃ大変だぞ箒さん
　あと食べながらしゃべってたのほほんさんをほんの軽くチョップした
「あいた！ムー！」
「ムーじゃないムーじゃ、あと痛くしてないでしょ…食べながらしゃべらないのはご飯でもお菓子でも変わらないよ」

「それはそうだけどー…ムー…」
「……お菓子あげるから機嫌直して」
「わかったー！」
困った顔とかってやっぱり苦手だな…
それにしてのほほんさんはお菓子好きだなー

そして次の休み時間
先ほど一夏を連れ出した箒さんも混じって４人で俺の机のところに集まっている
最初の１人に比べたら３人も増えて賑やかになったなぁ
しかし朝から変わらず視線を感じる
視線を感じるからか話がなくお菓子だけを食べている状況だ
見た感じ違うクラスの人たちは廊下からこっちを見てる
違うクラスだからねわかるわかる。
でも同じクラスの人たちもこっちを見てるんだよなぁ
話しかけていいよオーラ（？）って感じにだいぶオープンにしてるはずなんだけど誰も声を掛けてこない…
気兼ねなく話しかけてほしいんだけど、やっぱりこっちから声をかけるしかないのか

な…
「ちょっとよろしくて？」
「へ？」
声をかけるべきか否かを考えていたら声をかけられた
顔をあげると金髪で縦ロール、そして綺麗な碧眼を持つ女子が立っていた。
「何ですのその呑気な返事は？この私に話し掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではなくて？」
「ごめんなさいちょっと考えごとしてて…ところであなたは？」
「知らない？イギリスの代表候補生にして入試首席の、このセシリア・オルコットを!?」
「は、はい…」
そしてオルコットさんは一夏にも聞いたが知らないと言われ、そんな馬鹿なと言いたげな顔をして固まってしまった
固まってしまったオルコットさんをどうしようかと考えていたら一夏が俺を指でつっついてきている。何かあったのかな？
「どうしたの一夏？」
「なぁ楠木、代表候補生って何だ？」
ズコォォォォォ

本日２度目のずっこけが教室の周りに起きた…
みんながずっこけるようなことが１日に２度も起きるなんて今後無いんだろうなぁ
しかし言った本人は本気でわかっていないようだ
「い、一夏。代表候補生っていうのは読んで字の如くＩＳの国家代表のその候補だよ…」
「そうなのか、サンキュー楠木」
「字面でわかる気がするんだけど…」
「信じられませんわ！」バァン！
オルコットさんが怒りに任せて俺の机を思いっきり叩く
叩いた衝撃でお菓子が落ちそうになったがのほほんさんがすかさずキャッチ！
ナイスのほほんさん！とサムズアップをしたらのほほんさんは笑顔で答えてくれた
のほほんさんのおかげで大事なお菓子が床にぶちまくという惨事は回避できたので
よかったよかった
「代表候補生のこともわからないでよくこの学園にこれたものですわ！まぁでも？貴族
として下々に手を差し伸べるのがわたくしの務め。泣いて頼めば特別に最初からご教
授してあげても良くってよ？何せ私は入試で教官を倒したエリートですから」
「それなら俺も倒したぞ、教官」
「「えっ」」

その一言で周りのみんなが反応した
オルコットさんも「私だけと聞いたのですが？」と震えながら一夏に聞いたが「女子の中ではってことなんじゃないか？」と言われひどくショックを受けた
しかしそれだけでは終わらなかった
「その試験、楠木はどうだったんだ？」
「お、俺？俺も勝った…はず？」
「はずってなんだよ？」
「いやＩＳにさわる直前と試合が終わった後のことしか覚えてないんだよ…でも担当してた人が『まさか負けるなんて思わなかったわ』って言ってたから多分勝ったんだと思う」
「なんで記憶がないんだ？」
「…さぁ？」
と入試について話していたらオルコットさんや周りのみんな、箒さんやのほほんさんまで口を開けてポカンとしていた
えっどうしようこの状況…
と困惑していたらちょうどよくチャイムが鳴った
そしてチャイムが鳴ったことで我に返ったオルコットさんが

「後でまた来ますわ！逃げないことね！」
と言い放ち席に戻っていった
それに合わせてみんなも席に戻っていく
そして先生が来るまで俺は
『なぜ試合している時の記憶がないのか』
さっき話したからかこのことが頭から離れなかった

第3話　喧嘩両成敗と記憶がない試合

「では授業を始める…と言いたいがその前にクラス対抗戦に出る代表者を決めなくてはな」

クラス対抗戦？なにそれ？と周りを見渡してみたがみんなも知らないみたいだ

「代表者とは文字通り、このクラスの代表者だ。分かりやすく委員長とでも言うべきか。クラス対抗戦ではそのクラスの代表者達が実際にＩＳを使い、その実力を測るものだな。現時点ではそこまで差はなかろうが…我こそはという者はいるか？自薦でも他薦でも構わんぞ」

他薦…その言葉を受けてほぼみんなが手を上げていた

「織斑くんを推薦します！」

「私も織斑くん！」

「私もー！」

さすがはイケメン。みんなに推薦されてる

しかし当の本人は「俺!?」とものすごく困惑している。

　これは一夏に決まりかなと思いきや
「私はともぴーー！」
「私も巴くんかなー」
「私も！試験で勝ったって言うし！」
　のほほんさんが俺の名前を出したのを皮切りに俺も推薦されてしまった…
　記憶ないからどう戦ったかすらわからないんですけど…
「でも巴くん試験のこと覚えてないんでしょ？」
「多分初めて乗ったからインパクトありすぎて忘れてるだけでしょ！」
「そうかなー？」
　と女子のなかで俺の記憶がないのはこういう理由だと色々と議論が上がるが
「待て、覚えていないとはどういうことだ？」
　と織斑先生が話を遮り睨みながら俺に問いかけてきた…
　山田先生も心配している
　それにしてもすごいプレッシャー…蛇に睨まれた蛙みたいになりそう
「えっと…試験の時、ＩＳを触った後から試合が終わるまでの記憶がないんです」
「自分がどうＩＳを使い、どう戦ったか覚えてないんだな？」
「はい。申し訳ないですがそこのところは全く覚えていないです」

「そうか…巴、放課後に職員室に来い」
「わかりました」
織斑先生は険しい顔をしたままだった。
やっぱり記憶がないのは普通じゃないみたいかな…
とりあえず放課後に色々話してみよう
「ではとりあえず巴は保留にする。他にはいないのか？」
「納得いきませんわ！」バァン！
オルコットさんが今度は自分の机を叩きながら立ち上がった
代表候補生なのに誰にも推薦されなかったらそりゃ納得いかないよね…
でもこの状況で同情するのは火に油を注ぐことになりそう…
「そのような選出は認められません！クラス代表が男だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットに1年間その屈辱を味わえというのですか!?」
やばいこれ結構頭に血がのぼってないか？
しかしどうすればいいか考えがまとまらずオルコットさん怒涛の反論は続く
「実力で言えばわたくしこそクラス代表にふさわしいですわ！それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」
物珍しいって理由だけで代表候補生の自分は無視されたのだからそりゃ色々言いた

くなるだろう…
　しかしオルコットさんは俺と一夏だけにいってるつもりだろうけど、今このクラスの大半はその猿がいる極東出身の人たちばかりだ
　俺よりもみんなの方がイラついてるように見える…
　しかしオルコットさんの罵倒は続く
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で「イギリスだって対してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ？」…なっ!?」
　とうとうしびれを切らした人が出てきた…一夏だ
「あ、あ、あなたねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの!?」
「先にバカにしたのはそっちだろ!?」
「な、なんですってぇ!?」
　と二人がどんどんヒートアップしていく
　ヒートアップした二人の勢いで周りのみんなもイラついてたのはどこかにいっておろおろし始めた！
　あぁもう！これじゃ収拾がつかない！
「ス　ト　ー　ー　ー　ッ　プ　！　！」

と俺は大声を上げながら立ち上がった
何事かとみんながこちらを向く
仕掛けるなら今だ！
「オルコットさん！まずあなたは怒った理由は自分が代表候補生なのに推薦されなくて代表候補生になるために必死に努力したのにそれが認められないと思い、自分のプライドが踏みにじられたと感じたから！違う？」
「え、えぇそうですわね…」
「代表候補生じゃないからどれだけ悔しいかはわからないけど…さすがに言いすぎ！男の俺と一夏だけに向けて言うならまだわかる！」
そこで「おい!?」と一夏が言ったが気にしないでこのまま続ける
「でも日本をバカにするのは違うと思うよ。それとも日本はバカだっていうのはイギリスの総意なの？」
「い、いえそのようなことは…」
「なら発言に気を付けること！わかった!?」
「す、すみません…」
まずオルコットさんはこれでいいか
よし次！

「よく言ったぜ楠木！」
「えぇいうるさい一夏！次は君だ!!」
「なんでだよ!?」
「なんでもクソもあるか！確かにオルコットさんは言いすぎだしイラついたのもわかるけど、だからって言い返していいってことにはならないでしょ！」
「あんな言い方されたら誰だってイラつくだろ！楠木だってイラついただろ!?」
「そりゃイラついたさ！でも俺はそこでオルコットさんが何故そこまで怒ったのかを考えたんだ。さっき言った通り自分の努力が無視されたんだよ。一夏だって何か必死に頑張って努力したのにそれが完全に無視されたら嫌でしょ？」
「そうだな…」
「ね？まぁオルコットさんも度が過ぎてたけど」
「すみません…」
　オルコットさんがしゅんとなってしまったが自業自得だね
「てかお前はどっちの味方だよ!?」
「敵も味方もあるもんか！喧　嘩　両　成　敗　だ!!」
「お、おう…」
　これでなんとか喧嘩は収められたかな…だいぶ強引だったけど

あとはどうやって代表者を決めるか…

大層なこと言ったけどなにも思い浮かばない！

「織斑先生、それでなんですけど多数決だとオルコットさんが納得いかないので何かいい方法はありませんか？」

これぞ必殺！先生に頼る！

案が思い浮かばないなら先生の知恵を借りよう！

「そうだな、なら3人で総当たりの模擬戦を行い、その結果で代表を決めるか」

「待ってくれちふっ…織斑先生！俺はやらな「他薦されたやつに拒否権なんかない。いいな？」…はい」

「オルコットもそれでいいな？」

「はい！ありがとうございます！」

模擬戦か…確かにそれならオルコットさんも納得するな

待って？〝3人〟？俺は保留なのでは？

「なんだ巴。確かにさっきは保留と言ったが二人にあぁまで言ったんだ。参加させないわけがないだろう？なに本当に不味いならその前に止めるさ」

言いすぎたかぁ…でもＩＳに乗れる機会だしいっか

今度は記憶があればいいな

「わかりました。織斑先生」
「では模擬戦は1週間後に行う。では授業を始める」
その後は特に問題もなく授業が終わり放課後となった。
一夏は箒さんに「久々に会ったんだ。剣を見てやろう」と半ば強引に一夏を連れ出した。
周りから嫉妬の目を向けられていたが幼馴染みの特権というやつだね
一夏から聞いたが箒さんは剣道の全国大会で優勝をしてるほどの達人らしい。それに一夏も剣道をやってたみたいだ。
…なるほど。それは二人きりになれる口実になるな
俺も放課後なので職員室に来ている。
職員室って行くと関係なしに緊張するよね…
そして織斑先生に会い、内容が内容だから場所を変えると言われ生徒指導室に連れていかれました。
やっぱ記憶がないのは相当やばいのかな…
「巴。お前に来てもらったのはお前の入試の時の試合を見せるためだ。これを見て思ったことを素直に言ってほしい」

とディスプレイをこちらに向けた。
自分がどんな試合をしたのかずっと気になっていたから願ったり叶ったりだ

最初は手足を動かし動作確認していた。
なにせＩＳを動かすのは初めて、それくらいはやるだろう
そして手足の動作確認が終わるとアリーナの周りを飛んだ。
問題はここからだった。
俺は飛んだことなんてない…そのはずだ。飛行機にすら乗ったことないんだから
だが急加速、急減速や急転回、急上昇、急下降などとても初めてでいきなりやることとは思えないことをやっていた。試験官も舌を巻いていることから精度もそれなりだと思う。
そして試合…信じられない光景だった
試合が始まったと同時に俺は右手にハンドガン、左手に近接武器のブレードを持ち試験官に突っ込む
試験官もそんな単直な攻撃に当たるかと横に避けるが、俺は相手が動く先がわかっていたかのように右手のハンドガンで試験官を撃ち抜く。
その後も試験官は変則的に色々と動くが全て読んでいたのか俺の持つハンドガンに

当てられていた。
試験官もこのままやられるものかと瞬時加速（イグニッション・ブースト）と呼ばれる急加速技を使い俺の方に突っ込んだ。
織斑先生が初心者相手にこれは大人気が無さすぎると言っていた。
これには俺も少し驚いたように見えたがはすぐにブレードを両手持ちにし、こちらもブーストを吹かし突っ込んできた試験官にカウンターとして胴に一撃を与えた。
その一撃で試験官のＩＳのシールドエネルギーが尽き試合が終わった。
一方的すぎる…
果たしてこれが初めてＩＳに乗った人間の動きなのか？
今俺がＩＳに乗ったとしてもこんな動きが到底できる気がしない。
まずこれは本当に俺なのか？まだ他の人の試合だと言われた方が信じられる…
しかし顔を見た感じは俺だ…一体なんなんだ？
「どうだ？何か思い出せたか？」
「いえ全然思い出せません。というかこれは本当に俺なんですかね…？」
「私にはお前に見えるが？」
「ですよね…あまりにも自分だと思えないんです。今ＩＳに乗ったとしてもこんな動きができるとは思えません…」

「そうか」
「あと色々と納得しました。こんな動きをしたら教師の方々は期待しますよね…」
「記憶がないとは思わなかったからな」
「普通記憶が無くなる…なんてことはないんですよね？」
「あぁ、興奮して忘れるというのはあるがそれでも何もかも覚えてないというのは聞いたことがない」
　興奮して覚えてないか…
「すみません織斑先生見たいところがあるんですがよろしいですか？」
「いいぞ。どこだ？」
「試合の前に飛んでいる時なんですが俺の顔がはっきりわかるところってありますか？」
「顔？いいが少し待ってろ……これでいいか？」
　織斑先生は俺の顔がアップしたところで映像を止めてくれた
「ありがとうございます。…それで何ですけど織斑先生にはこの顔はどんな風に見えますか？少なくとも俺には興奮しているようには見えないです」
「そうだな。私には色々試してみて『この程度か』と言っているように見えるな」
「やはりそんな感じに見えますよね。こんな興奮もしていなさそうなのに記憶って無く

なるものなんですか？」
「普通はないな」
「男性でＩＳを使えるからですかね？」
「それもわからん。なにせお前を含め二人しかいないからな」
そうだ、そもそも前例が無いんだ。
今この世界でＩＳを起動できるのは俺と一夏だけ…他にもいるかもしれないが世界が認知してるのは俺達二人だけだ。
だとしたら何かあるかもしれない。だけど…
「織斑先生…俺はロボット物が好きです。だから自然とＩＳに憧れました。でもＩＳは女性にしか動かせない…最初はそれを聞いてひどく落胆しました。だけど俺にもＩＳが動かせるのを聞いてほんとに嬉しかったんです。憧れのＩＳに自分が纏って空を飛べるんだって…」
今でもそう思う。あんなカッコいいスーツを纏って空を飛べたならどれほど気持ちいいんだろうか？どれほど興奮するんだろうか？
なのにこんな顔だ。俺は本当に感動も興奮も何も感じなかったのか…
「俺の記憶があってこんな顔をしてるのを覚えているならまだ納得します。でも、今空に飛べるなら飛びたいと本気で思ってます。だから今この何も感じていなさそうな自

分が怖いんです…」
自分のことが怖い…
こんなことは生まれて初めて思った
卓越した戦闘技能
感動も何も感じていない顔
そんな自分とは思えない自分
…怖いけど、いや怖いからかそんな自分の正体がなんなのか知りたい
だから…

「織斑先生、俺のことを調べてくれませんか…？」

第４話　天災と再開?

「織斑先生、俺のことを調べてくれませんか…?」

　その言葉を受け織斑先生は少し悩んだ様子だったが

「わかった。これは普通ではないと私も思う」

「じゃあ!」

「だがその前に確認したいことがある。お前に覚悟はあるか?」

　覚悟…そんなものは調べてくれと言ったときから決まってる。

「覚悟ならあります。このままＩＳに乗っても記憶がないままならいっそ乗れなくなる方がマシです」

「…すまん愚問だったか。」

「いえ確認は大事なことですから気にしないでください」

「そうか、だがその覚悟は忘れるなよ?お前に会わせたい奴がいるがそいつはブッ飛んでるなんてものじゃないからな」

「一体どんな人に会わせる気なんですか…?」

「一言で言うとＩＳの開発者だ」
なるほどＩＳの開発者か、ＩＳ関連だからその分野の人の力を借りれば何かわかるかもしれない
でもブッ飛んでるのはちょっと不安なんですがそれは…
と織斑先生はケータイを取り出し俺に会わせたい人に電話をかけた。
…すると何処からか着信音が鳴る
ん？俺のケータイかな？それにしてもすごいタイミングだな、と自分のケータイを見るが俺のではなかった。
では誰？と思っていたらピッと電話に出る音が聞こえた。
「もすもすひねもすぅ。わたし束さん。今生徒指導室の前にいるの」
生徒指導室の外から女性の声が聞こえてきた。
なんかメリーさんの電話みたいなことを言ってる
こわいから誰か注意して…
てか会わせたい人ってもしかしてこのメリーさん的なことをやってる人!?
「…はぁ」
織斑先生がでかいため息をついたぞ…
もしや俺に会わせたい人っていつもこんな調子なのかな？

織斑先生が諦めたような顔をして生徒指導室のドアを開けた。
すると声の主と思われる女性が立っていた。
頭にうさ耳を着けていて不思議の国のアリスのアリスが着ていたドレスっぽいのを着ていた
あとでかい…てか待てこの人どっかで見たような?
「やっほー!みんなのアイドル、束さんだよー♪」
「束、いつからそこにいた?」
「もーちーちゃんってば感動の再会なのに冷たいなー、そんなところも好きだけどね!」
「いいから答えろ」
ひぇ…
織斑先生こっちに向けてないのにプレッシャーが半端ないんですが…
そんなプレッシャーをぶつけられてもけろっとしてる束?さん
すごいな、こっちは息が詰まりそうなのに…
「ちーちゃんの『これを見て思ったことを素直に言ってほしい』ってところかな?」
最初からじゃないか…
「最初からじゃないか…」
織斑先生も困惑してるよ…

「そんなことよりちーちゃん！ハグさせてハグ！」
「ダメだ」
「なんでさ！いつもならハグさせてくれるのに！」
「一度もハグさせたことなどないはずだがな？」
「ちきしょう！なら実力行使だ！とぉ！」
「ふん！」
織斑先生にハグを要求したが却下され、それでもめげずに織斑先生に飛びつこうとしたが織斑先生の片手で頭を鷲掴みにされてハグできなかった
えっ人の頭鷲掴みってやばくね？
「束、私の言いたいことがわかるか？」
「もちろん！『愛してる束』でしょ！」
そう言った途端、織斑先生の手に力が入る
メキョメキョメキョメキョメキョメキョメキョメキョメキョメキョ‼
ちょっと待ってちょっと待って!!??
人の体から出しちゃいけない音が出ていませんか!?
死んじゃう！あの人死んじゃう!!
実際「オガァァァァ!!?」って女性が発していい声じゃない声出しちゃってるよ!?

た、助けなきゃ！
「おおおお織斑先生、そそその辺にしといた方が…」
「…命拾いしたな束」
そう言い織斑先生は鷲掴みしてた手を離した
そしたら死にそうになってた人はそのまま頭を抱えて蹲ってしまった…大丈夫かな?
それと今後織斑先生は怒らせないようにしよう…
もしあれを喰らったら俺確実に死んじゃうよ…
てかあの強烈な出席簿はあれはあれで拘束具だったのか?
いや手加減してたのか?…手加減ってなんだっけ?
「まさかこんな俗物に心配されるとは束さんも落ちたものだね」
「ぞ、俗物…」
なんとか助けてあげたのに罵られた
いや別にお礼が欲しくて助けたわけじゃないけどいきなり罵らるのは心に来ますね…
「その辺にしとけ束」
「…ちーちゃんがそう言うなら我慢するよ。まぁ束さんもお前のことは気になっていた

からね」
「お前が他人に興味を持つとは珍しいな？」
「まーねー」
織斑先生が言うにはこの人は他人に興味はないのか…
とジーッとこの人を見ていたら…あっ思い出した！
この人元祖ＩＳの開発者の〝篠ノ之束〟博士だ!?
確かＩＳを発表したあと日本の研究所でＩＳを作ってたはずだけどＩＳの心臓とも呼べるＩＳコアを４６７個を作ったところで謎の失踪を遂げた人。
ＩＳコアの謎は深くこの人しか作れなくて、ＩＳ自体の数が増えないからか全国で指名手配されてるんだっけ…
天才だけどやることが色々とぶっとんでいるからか呼ばれた名が『天災』…
てかなんでこんな人がこんなところに!?
「その顔を見るに束さんのことを思い出したようだね？あの日以来だね」
「はい、思いだしまし…へ？」
えっあの日以来？
篠ノ之博士とは初対面のはずだけど…どういうことだ？
「まさか覚えてないの？」

「は、はい…」
さすがに篠ノ之博士と会っていたら忘れないと思うんだけどなぁ…
まさかまた記憶喪失?憧れのＩＳ開発者と会ってたのに忘れてるなんて…
「じゃあ記憶をなくす条件はＩＳに触るってことじゃないのか…」
ぶつぶつと博士は何か考えてしまったが
「おい待て束、あの日以来とはなんだ?」
と織斑先生が俺の聞きたいことを代弁してくれた
「えっとね、男性ＩＳ適正者ってことでこいつ拉致しようとしたの」
「「はぁ!?」」
衝撃の事実、俺拉致されかけてた
「まさかとは思うが一夏にもそんなことをしようとしたのか?」
「いっくんは確かに男性適正者だけどそんなことしたら箒ちゃんが悲しんじゃうからね、お姉ちゃんとしてそんなことは断じてしません!」
「そうか、ならいい。続きを話せ」
いいのか…?
それと箒さんは博士の妹さんなのか
珍しい苗字だとは思ったけど特に気にしてなかったな…

「こいつが検査入院してた時に拉致しようと思ってね。で難なくこいつの入院室まで行ったの。だけどいざ拉致しようとこいつに触ろうとしたけど寝てるはずのこいつに手を掴まれてね…さすがの束さんも驚いたよね寝てるのを確認したのにさ」

えっ俺？

入院してたときは全日ぐっすり寝てたはずだけどなぁと考えてると

「その顔を見るに本当に覚えてなさそうだね」

「すみません…」

「…まぁいいや。でさ、こいつ私の手を掴んでこう言ったんだよ？『貴様、何をするつもりだ？』って」

俺は生まれてこのかた他人のことを『貴様』だなんて呼んだ試しはない…

だけど現に博士は俺が博士に貴様と言われたと言っている…

ますます記憶がない自分のことがわからなくなる

「そしてこいつとちょっと話したよ」

「何を話したんだ？」

「拉致していい？って」

ド直球で本人に聞いちゃうのか…

まぁその本人は覚えてないんですけど…

「そしたらこいつさ『日を改めてほしい』って」
「えっ」
　ちょっと待って！俺は拉致を了承していたの!?
「『近いうちにまた会うことになるだろう…その時によろしく頼む』ってね。」
「お前なら無視して拉致を敢行していたと思うが?」
「東さん的には無視しても良かったんだけどこいつ普通じゃなさそうだししかも『準備がまだなんでな』ってなんか面白そうなこともいいだしたからその口車にのってやったのさ」
　準備?本当になんのことだ?
　俺の知らないところで色々と話がありすぎる
　俺自身の話のはずなのに…
「そしてその日が今だと?」
「本人が調べてほしいって言ってるんだから今しかないでしょ！」
「いいのか巴?」
「はい。ＩＳ開発者の篠ノ之博士に見てもらえるなんて光栄ですよ」
「こいつもこう言ってるし！いいでしょちーちゃん！」
　光栄に思ってるのは本当だ…ただ不安も多々あるけど

織斑先生も私も同行させるなら認めると一緒に来てくれた。
織斑先生がいてくれる！こんなに心強いことはない！
そして博士に連れられ海の方に来ていた
なぜ海？ＩＳの倉庫なら反対側のはず…
と思ってたら博士がパチンと指を鳴らす
すごい綺麗な指パッチンだな…と関係ないことを思っていたら目の前の海から海水を掻き分け何かが浮上してきた。
浮上してきたものはオレンジ色をした潜水艦だった。
「束、この船は？」
「束さんが作ったニンジン型移動式研究所だよー」
「設備なら学園内にもあるが？」
「あんなちゃっちぃ設備でこの束さんが満足に調べられると思う？まぁ束さんなら出来なくはないけど揃ってるところが近くにあるならそれを使うのが手っ取り早いじゃん！」
「確かに早く調べられるならそれがいいな」
「でしょー！」
もうなんでもありだなぁと驚きながらそう思っていた俺は二人の会話を聞いている

ことしか出来なかった

そして艦内に入り色んな機械が置いてある部屋に入った。

その部屋の中心には塗装のされていないＩＳが置いてあった。

博士によるとこのＩＳは１つ前の試験機だったが、今は別の研究のためにそのままになってしまっているとのこと。

さらにそのＩＳは規格外の４６８個目のＩＳコアを使って作られたＩＳだった。

「さて、じゃあ早速だけど始めるよ」

「あ、はいよろしくお願いします。」

色々とブッ飛んでいて理解が追いつかないが博士がやる気になってくれているならそのやる気を削がないそうにしないとな

自分のためにも…

「まずはこれを着けて」

と博士は俺に腕輪の形をした何かしらの装置を投げ渡した。

なんだこれ?

「それは君のバイタルなどを見るための装置だから腕輪してない方の腕にでも着けとい て」

「あっ、はいわかりました。」
なるほどバイタルチェックか
それならと言う通りに腕輪を着けた。
「バイタルは問題なし。じゃあＩＳに触ってみて」
「巴、何か違和感を感じたらすぐに離れろ。いいな？」
「了解です。」
俺は指示された通りにＩＳに触ろうとする。
気絶にしないでくれと願いを込めながら触る…
そんな俺の願いは叶えられずに俺の視界は真っ暗になった。